

# 國學院大學學術情報リポジトリ

中国宗廟祭祀と古代の大嘗祭：  
天子の宗廟と大嘗宮・神嘉殿との比較を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 大嘗宮, 神嘉殿, 宗廟, 祖先祭祀, 大嘗祭 キーワード (En): 作成者: 高, 夢雨 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000049">https://doi.org/10.57529/0002000049</a>

# 中国宗廟祭祀と古代の大嘗祭

——天子の宗廟と大嘗宮・神嘉殿との比較を中心に——

The Sacrificial Rites of Chinese Ancestral Temple and The *Daijosai* in Ancient Times:  
A Comparative Study of The Imperial Ancestral Temple and The *Daijokyu* & *Shinkaden*

高 夢 雨

キーワード：大嘗宮 神嘉殿 宗廟 祖先祭祀 大嘗祭

关键词：大尝宫 神嘉殿 宗庙 祖先祭祀 大尝祭

## 要旨

大嘗祭は天皇が即位後、仮設の大嘗宮正殿で初めて皇祖神に新穀の神饌を捧げ、自ら御飯・御酒を嘗する一代一度の大祀であり、それを常設の神嘉殿で毎年に行うのが新嘗祭である。大嘗祭と新嘗祭は、名称が『礼記』に記した宗廟祭祀の嘗に由来し、祭儀的にも、天皇が新穀を嘗する前にまず祖先に捧げるという点で中国の嘗と共通する。その祭祀施設である大嘗宮・神嘉殿は宗廟と共に宮城の内部に区画・遮蔽された東西対称の建物であり、堂・室或いは東西廂を持つ。内部では神座・神服・神饌が設けられ、衣食住を整えた神の日常生活の場になり、そこで如在の礼を尽くしている。宗廟と大嘗宮・神嘉殿は祖先・祖神を饗応する場として共通性を持ち、その関連性について、三～六世紀、中国や朝鮮半島からの先進的な文化・技術と共に伝来した祖先意識、宗廟・陵寢祭祀の影響を受け、祖先・死者への供膳祭祀の形態は大嘗祭の原型——新嘗・古墳儀礼として成立し、七世紀中頃以降、唐の律令制度が導入され、それに相応する宮都の構造、建築の様式と儀礼が整備され、そのなかで古代の大嘗宮、大嘗祭が成立したと推測される。

## 摘要

天皇即位后会在临时建造的大尝宫举行大尝祭，首次向皇祖神进献新谷等神饌，并亲自品尝。与此类似的新尝祭每年会在宫中常设的神嘉殿举行。日本的“尝祭”的名称来源于《礼记》中记载的宗庙祭祀的“尝”，且二者在祭仪上，天子、天皇在品尝新谷前，先进献给祖先、祖神这点十分相似。二者的祭祀设施都位于宫城内部，是东西对称的建筑，拥有堂室或者东西廂结构，并在内部设有为神准备的坐席、衣服、饮食，形成神的日常生活的场所，以便进行“如在之礼”。关于二者的关系，笔者认为：三至六世纪，日本在中国宗庙、陵寢祭祀的影响下，出现了向祖先、死者供饌的祭祀形态，即大尝祭的原型——新尝、古坟仪礼。七世纪中叶以后，随着律令制度的导入和宫都构造、建筑样式的整備，古代的大尝宫、大尝祭应运而生。

## はじめに

大嘗祭とは、天皇が即位の年或いは翌年の十一月中卯または下卯に、仮設の大嘗宮正殿で皇祖神へ新穀の神饌を捧げ、自ら御飯・御酒を嘗する一代一度の大祀であり、それを常設の神嘉殿で毎年に行うのが新嘗祭である。大嘗祭は古来、天皇親祭による神饌供進・共食儀礼とされているが、昭和の大嘗祭の際に折口信夫の「大嘗祭の本義」<sup>(1)</sup>で、天皇が寢座で「天皇霊」を身に着けるとい説が打ち出され、学界に多大な影響を与え、その寢座秘儀説の延長線上に聖婚儀礼説<sup>(2)</sup>等も出現した。

しかし、それらが後に岡田莊司氏によって問題提起され、寢座で秘儀が行われる証拠はなく、天皇が自ら皇祖神へ稲や粟の神饌を捧げ、農耕収穫を感謝し災害予防を祈念することが大嘗祭の本質であると指摘された<sup>(3)</sup>。近年、笹生衛氏は大嘗祭の原形を死者・祖先を饗応する古墳儀礼に求め、大嘗祭の祖神祭祀の性格を論じている<sup>(4)</sup>。

中国儒教の経典『礼記』には、天子の宗廟で行う正式的な嘗祭と月毎の薦新行事として、「大嘗」(同書祭統)と「嘗新」(同書月令)の表現がある。祭儀的に、天子が新穀等を嘗する前にまず祖先に捧げるとい儀礼は、天皇が新穀の御飯・御酒を嘗する前にまず皇祖神に捧げることと共通する。筆者は大嘗祭の成立と性格について、日本の大嘗・新嘗は宗廟祭祀の祖先祭祀の形式と意義を理解した上で、その祭儀の名称を借用し、宗廟祭祀の影響を受けて形成されたことを論じているが、両者の祭祀施設に関する比較考察は不十分であった<sup>(5)</sup>。

それについて、池浩三氏は大嘗宮正殿と『礼記』『儀礼』に見る中国の廟寝形式及びそこでの儀礼を比較して考察した<sup>(6)</sup>が、折口の「真床覆衾」論に従い、大嘗宮における衾を天皇が覆うものとして、それを中国の正寝で行う死者を衾等で覆う小殮・大殮の喪礼と比較し、大嘗祭を死と再生の擬態を演じる儀礼とする。し

(1) 折口信夫「大嘗祭の本義」(初出一九三〇)『折口信夫全集 三』中央公論社、一九九五

(2) 岡田精司『古代王権の祭祀と神話』(初出一九六二)塙書房、一九七〇

(3) 岡田莊司『大嘗祭と古代の祭祀』吉川弘文館、二〇一九

(4) 笹生衛『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館、二〇一六

(5) 高夢雨「古代日中の嘗祭—天子宗廟祭祀と大嘗祭の祭儀比較—」『國學院雑誌』第一二四巻第一号、二〇二三

(6) 池浩三「大嘗宮正殿の室・堂の性格—中国古代の宗廟形式との比較において—」『日本建築学会論文報告集』三〇八、一九八一

かし、大嘗宮の寢座は天皇ではなく、神のために設置される<sup>(7)</sup>ことが明らかにされ、池氏の論説は立証できなくなった。

丸山茂氏は新嘗祭を行う神嘉殿の建築様式とそこでの儀礼は、宗廟と宗廟祭祀の影響を受けていると指摘した<sup>(8)</sup>一方、大嘗宮正殿と喪葬施設の廬を比較し、和田萃氏の説いた、持統天皇元・二年に天武天皇の殯宮で行った嘗は中国の嘗祭のように新穀を親供する儀礼で、大嘗祭と関わっているという論説<sup>(9)</sup>に従い、大嘗祭と喪葬儀礼の関連性を論じた<sup>(10)</sup>。しかし、中国では殯宮にも新穀等を奉る特別な奉奠、薦新行事があり、天武天皇の殯宮で行う嘗は宗廟祭祀の嘗祭に倣ったものとは断言できず、大嘗祭と喪葬儀礼は直接に関わっていない。

以上の先行研究を踏まえ、宗廟祭祀と大嘗祭・新嘗祭を皇祖神・祖先への神饌供進・共食儀礼として、宗廟と大嘗宮・神嘉殿との関連性を再検討し、大嘗祭の成立と性格を再確認する必要があると考えられる。

## 一、立地と建築様式

### 1、天子の宗廟

『礼記』祭義に「建国之神位、右社稷而左宗廟」とあり、国君の宗廟は王城の東南、雉門と庫門の間に立ち、社稷壇と東西対称する。前漢のように地方に郡国廟を、陵寢の傍らに原廟を立てる異例もあるが、中央の太廟の立地規範は明清まで継承されている。一方、宗廟の構造は後漢より変化し、『元史』卷七五・祭祀四に古来の二種類の天子の宗廟の構造を以下のように論じている。

一曰<sub>レ</sub>都宮別殿、七廟九廟之制<sub>一</sub>。祭法曰、天子立<sub>レ</sub>七廟<sub>一</sub>、三昭三穆与<sub>レ</sub>太祖之廟<sub>一</sub>而七、諸侯、大夫、士降殺以<sub>レ</sub>兩。晋博士孫毓以謂、外為<sub>レ</sub>都宮<sub>一</sub>、内各有<sub>レ</sub>寢廟<sub>一</sub>、別有<sub>レ</sub>門垣<sub>一</sub>。太祖在<sub>レ</sub>北、左昭右穆、以<sub>レ</sub>次而南是也。前廟後寢者、以象<sub>レ</sub>人君之居、前有<sub>レ</sub>朝而後有<sub>レ</sub>寢也。廟以藏<sub>レ</sub>主、以四時祭。寢有<sub>レ</sub>

(7) 岡田莊司「<sub>レ</sub>真床覆衾、論と寢座の意味<sub>一</sub>」(初出一九八九)『大嘗祭と古代の祭祀』吉川弘文館、二〇一九

(8) 丸山茂「平安時代の神嘉殿について：神事伝統の継承からみる常設神殿の一成立過程」『日本建築学会論文報告集』三二六、一九八三

(9) 和田萃「服属と儀礼—殯宮儀礼の再検討」伊藤幹治編『講座日本の古代信仰 三 呪ないと祭り』所収、学生社、一九八〇

(10) 丸山茂「倚廬・休廬・廬—建築様式からみた大嘗宮正殿の形成についての一試論—」『建築史学』六、一九八六

衣冠几杖象生之具<sub>レ</sub>、以薦<sub>レ</sub>新物<sub>レ</sub>。(中略)二曰<sub>レ</sub>同堂異室之制<sub>レ</sub>。後漢明帝遵<sub>レ</sub>儉自抑、遺詔無<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>寢廟<sub>レ</sub>、但藏<sub>レ</sub>其主於光武廟中更衣別室<sub>レ</sub>。其後章帝又復如<sub>レ</sub>之、後世遂不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>加。而公私之廟、皆用<sub>レ</sub>同堂異室之制<sub>レ</sub>。

都宮別殿制は三礼(『周礼』『礼記』『儀礼』)に語る周制である。天子の宗廟は七廟によって構成され、始祖の太祖廟は北にあり、その子孫の昭穆廟は長幼の序に従って南へと配列され、東側は昭廟(二・四・六世)であり、西側は穆廟(三・五・七世)であり、昭穆廟は太祖廟を中軸とした東西対称の構造である。八世以降、昭穆に則って各廟主を一廟ずつ北へ遷し、北端の廟主は太祖廟に遷し、空けてきた南端の廟に新しい主を納める<sup>(11)</sup>。国君の住居は前に朝があり、後ろに寝があることを象徴して宗廟に前の廟と後ろの寝が設けられ、各廟は門と垣で区画される。廟は主を納め、時祭を行う場所で、庭、堂・室、東西廂、東西房、夾室等がある。寝は祖先の衣冠几杖等、生きていることを象徴する用具を納め、薦新の儀を行う場所で、廟とはほぼ同じ構造であるが、東西廂はない<sup>(12)</sup>。

清・戴震『考工記図』に「宗廟。於<sub>レ</sub>顧命<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>天子路寢之制<sub>レ</sub>、於<sub>レ</sub>觀礼<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>天子宗廟之制<sub>レ</sub>、降而諸侯、下及<sub>レ</sub>大夫士<sub>レ</sub>、広狭有<sub>レ</sub>等差<sub>レ</sub>、而制則一」とあり、天子の宗廟は諸侯以下の宗廟とは広さの差があるが、規制は同じであるという。同書をもとに、周天子以下の宗廟の廟の内部構造が概ね図1のように復元できる。

墻で囲まれた宗廟は南正面に門を設け、東北隅に闕門を設ける。門に入ると中庭であり、そこに碑がある。唐・陳という煉瓦道に沿って、阼階・西階或いは側階に上ると堂であり、堂に東楹・西楹という柱がある。堂の東西両側は序で東夾・西夾と区切られ、北側は墻で室と区切られる。夾室の南側は東堂・西堂(廂ともいう)で、北側は東房・西房である。東房の北半は北堂で、北堂の北側に北階がある。東房・北堂と西房は室を挟む。室、房、夾の間は墻で区画され、西房の東南隅、東房の西南隅に戸があり、室の南側に戸と牖が一つずつある。堂の周りは

(11)『春秋公羊伝』(魯)文公二年「毀廟之主、陳<sub>レ</sub>於太祖<sub>レ</sub>。」一説、周制、二祧(文王・武王の廟)は毀せず、四世以降の毀廟の主は昭穆によって二祧に遷す(『通典』卷四七「鄭玄注……祭法云、天子遷廟之主、以<sub>レ</sub>昭穆<sub>レ</sub>合藏<sub>レ</sub>於二祧之中<sub>レ</sub>。』)。周七廟制における二祧問題に関して、これを不遷の文・武二王とする鄭玄説と高祖の祖・父とする王肅説が対立し、後世聚訟の的になっているが、形式・内容何れの面から考察しても、王説の比較的優位を認めざるを得ないと池田末利が指摘している(池田末利「廟制續考——祧の本質と文・武二祧説」(初出一九五九)『中国古代宗教史研究：制度と思想』東海大学出版会、一九八一)。

(12)『爾雅』釈宮「室有<sub>レ</sub>東西廂<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>廟、無<sub>レ</sub>東西廂<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>室曰<sub>レ</sub>寢。」

壁があり、庭の周りは牆がある。南宋・李如圭『儀礼釈宮』に、

自<sub>レ</sub>門以北、皆周以<sub>レ</sub>牆……西牆在<sub>二</sub>中庭之西<sub>一</sub>、則牆周<sub>二</sub>乎庭<sub>一</sub>矣。西壁在<sub>二</sub>西堂下<sub>一</sub>、則牆周<sub>二</sub>乎堂<sub>一</sub>矣。牆者、墉壁之総名。室中謂<sub>二</sub>之墉<sub>一</sub>、昏礼尊<sub>二</sub>于室中北墉下<sub>一</sub>是也。房与<sub>レ</sub>夾亦謂<sub>二</sub>之墉<sub>一</sub>、冠礼陳<sub>二</sub>服于房中西墉下<sub>一</sub>、聘礼西夾六豆設<sub>二</sub>于西墉下<sub>一</sub>是也。堂上謂<sub>二</sub>之序<sub>一</sub>、室房与<sub>レ</sub>夾謂<sub>二</sub>之墉<sub>一</sub>、堂下謂<sub>二</sub>之壁<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>之牆<sub>一</sub>、其实一也、随<sub>二</sub>所在<sub>一</sub>而異<sub>二</sub>其名<sub>一</sub>耳。

とあり、宗廟は重層的な垣(墉、序、壁、牆を含む)で区画・遮蔽されていることが分かる。廟の北側に寢があり、廟・寢という全体の周りは四周の牆、大門、閤門で区画されている(『儀礼釈宮』、南宋・楊復『儀礼図』)。

同堂異室制は後漢以降に使用されてきた規制であり、一人の先祖は一殿を持つという従来の規制を改め、先祖全員の神主を太廟という一殿の異なる室に納めるので、太廟制とも呼ばれる。後漢明帝は原廟を立てず、自分の神主を後漢始祖である光武帝の廟の更衣別室に納めようと命じたので、のちの後漢皇帝もそれに従って神主を光武廟に納め、同堂異室制の由来になっている。同堂異室の構造は従来の同宮異殿(都宮別殿)の構造を簡略化したものであり、後世の各王朝に神主の配置方法等をめぐってまた変容を示すため、本稿で具体的な考察を省略する。

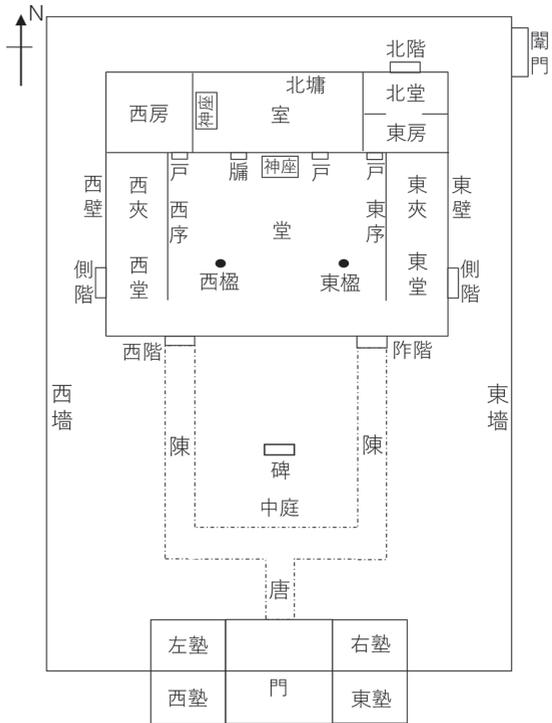


図1 宗廟図(『考工記図』をもとに)

## 2、大嘗宮・神嘉殿

大嘗宮は齋行する度に朝堂院龍尾道下の南庭<sup>(13)</sup>に仮設する。『貞観儀式』(以下、『儀式』)<sup>(14)</sup>によれば、大嘗祭の十日余り前に、大嘗宮用材の黒木・萱等を朝堂院含章堂・含嘉堂の間に運搬し、七日前に齋国の入夫が造営を始め、五日間で完成させる。天皇の卯日神事が終わった後、辰日卯時二刻に大嘗宮を壊す。

大嘗宮は東西二十一丈四尺、南北十五丈の規模である(図2)。外縁は柴垣の宮垣で幾重にも重ね、宮垣の東西南北に各々門を開ける。南北門の内側に屏籬を立て、外側に楯二枚・戟四竿ずつを立て、東西門の外側に屏籬を立てる。南北門の屏籬の間に中籬を立て、その南端に正殿への出入りのために通路を設ける。中籬の東西両側に南北方向の中垣を立て、中垣の南北の両端に各々小門を開ける。その両端の小門の間、東西門の南側に東西方向の中垣を立てる。悠紀・主基院は宮垣・中垣、中籬・屏籬で区画・遮蔽され、中籬を中軸とした東西対称の構造である。また、木工寮が大嘗院の北側に廻立殿を作り、主殿寮が斑幔を以て東・西・北を囲む。

『儀式』に示された大嘗宮の構造は、平城宮朝堂院跡で発見された大嘗宮遺構に遡る。平城宮第一六三・一六九次調査に東区朝堂院で五期の大嘗宮遺構(01期=元正天皇、02期=聖武天皇、A期=淳仁天皇、B期=光仁天皇、C期=桓武天皇)が検出され、第三六七・三七六次調査に中央区朝堂院で一期の大嘗宮遺構(称徳天皇)が検出されている<sup>(15)</sup>。この六期の大嘗宮遺構は、正殿の位置が少しずつ南に移動し、膳屋の区画に小門と東西門が新設されるといった変遷が見られるが、二院の構造や膳屋・白屋・正殿等の配置は『儀式』と合致する。また『続日本紀』

(13) 平安中期以後は大極殿の焼失等異例のある時に豊楽院・内裏紫宸殿南庭で大嘗祭が斎行された(岡田莊司「大嘗祭」『事典 古代の祭祀と年中行事』吉川弘文館、二〇一九)。

(14) 大嘗宮の構造や内部配置について、皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、二〇一二)を参照している。

(15) 橋本義則「第二次朝堂院地区(第一六一・一六三次)の調査」『奈良国立文化財研究所年報一九八五』一九八五  
 館野和己「推定第二次朝堂院朝庭地区(第一六九次)の調査」『奈良国立文化財研究所年報一九八六』一九八六  
 上野邦一「平城宮の大嘗宮再考」『建築史学』二〇、一九九三  
 清永洋平他「中央区朝堂院の調査—第三六七・三七六次」『奈良文化財研究所紀要 二〇〇五』二〇〇五  
 中川あや他「中央区朝堂院の調査—第三八九次」『奈良文化財研究所紀要 二〇〇六』二〇〇六

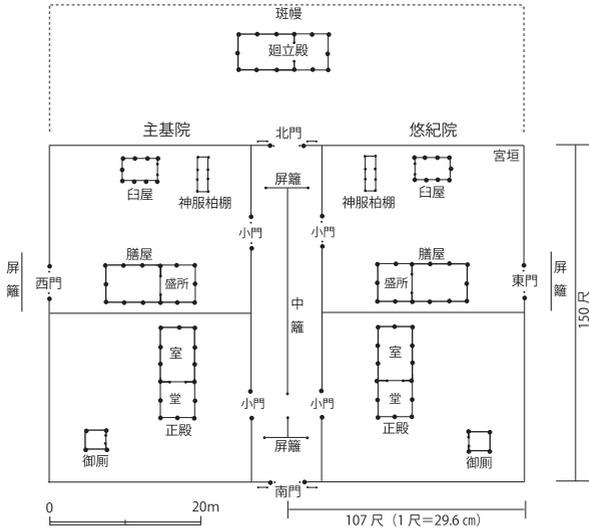


図2 大嘗宮図(『訓読註釈 儀式 踐祚大嘗祭儀』をもとに、笹生衛「『記紀』と大嘗祭—大嘗宮遺構から考える『記紀』と大嘗祭の関係—」より)

文武天皇二年(六九八)十一月己卯条にある「直広肆榎井朝臣倭麻呂豎<sub>二</sub>大楯<sub>一</sub>、直広肆大伴宿祢手拍豎<sub>二</sub>楯杵<sub>一</sub>」という記述が『儀式』と合致することから、平城宮大嘗宮遺構の示した南北門の設置は、少なくとも文武朝に遡り、更に大嘗宮の二院構造は、畿外斎国を悠紀・主基に分けて大嘗を行う天武朝に遡る可能性があると指摘されている<sup>(16)</sup>。

同じく皇祖神へ神饌を供進する施設、新嘗・神今食を行う神嘉殿は、中和院に常設するが、新嘗祭の前に炊殿を新設する。神嘉殿は天長七年(八三〇)以前に成立し、天喜六年(一〇五八)と長寛元年(一一六三)の火災を経て安元三年(一一七七)に焼亡のまま再建されていない<sup>(17)</sup>。神嘉殿の構造について、「中央母屋三間塗籠」(神殿)、「西二間塗籠」(西隔、御在所、寝所、寝内)、「東二間塗籠」(東

(16) 笹生衛「古代大嘗宮の構造と起源—祭祀と考古資料から考える祭祀の性格—」『神道宗教』二五四・二五五(特集「大嘗祭」)、二〇一九

笹生衛「大嘗祭の意味と起源—大嘗宮から考える祭祀の意味と神宮との関係—」『瑞垣』二四五、二〇二〇(一)

笹生衛「『記紀』と大嘗祭—大嘗宮遺構から考える『記紀』と大嘗祭の関係—」『国学院雑誌』第一二一巻第一号、二〇二〇(二)

(17) 註8前掲丸山氏論文

隔、供奉神事内侍以下候所)、東庇(東廂)、西庇(西廂、寢側、御湯殿)、南庇(南廂)、北庇(北廂、御装物所、内侍以下座)、南階といった部分が『江家次第』『新儀式』『西宮記』等に確認できる。東西脇殿を持つ建築配置は中国住宅の「三合院」形式の流入であり、その脇殿が「廂」と呼ばれたのも中国建築の直接の影響かもしれないと指摘されている<sup>(18)</sup>。また、神嘉殿の神殿・西隔・東隔が三室並ぶ形式と東西廂を持つ構造は、室・西房・東房が三室並び、東西廂を持つ宗廟の形式と類似し、神嘉殿は宗廟の建築形式に倣ったとされている。

### 3、小括

天子の宗廟(中央の太廟)と大嘗宮・神嘉殿の異同を纏める。

共通点について、両方は共に宮城の内部に区画・遮蔽された東西対称の建築であり、神饌を調理・供進・共食する施設、堂室或いは東西廂を持つ施設がある。また、大嘗宮は『儀式』『延喜式』の段階ではまだ地床式建築であるが、平安時代後期から階を設けた高床式建築になっており<sup>(19)</sup>、階を設ける宗廟と似ている。但し、元来の地床式大嘗宮の祭祀形態も宗廟祭祀に見られる。『礼記』礼器に「有<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>貴者<sub>一</sub>、至敬不<sub>レ</sub>壇、埽<sub>レ</sub>地而祭」という理念が示され、その実例として、八代前の遠祖に対して埽、つまり掃除された地面で祭ることがある<sup>(20)</sup>。地床式大嘗宮について、岡田莊司氏はそれを古代の土座祭祀の伝統とし、天皇が大地と直接接触することは大地の靈性を身に受け、不浄を忌避する作法だと考えられている<sup>(21)</sup>。同じく土座祭祀ではあるが、至敬の作法か不浄を忌避する作法かといった理念的な相違があるのであろう。

相違点について、まず立地的に、天子と諸侯の宗廟は王城の中軸の東南側に立ち、社稷壇と対称することから、宗廟・社稷の祭祀は国家祭祀の両輪としての性格が見られる。それに対し、大嘗宮(朝堂院)は宮城(大内裏)の中軸に、神嘉殿(中和院)は宮城の中心に立ち、皇祖神祭祀の位置付けと重要性が窺える。

また建築様式的に、宗廟は常設の建物として祭祀の前に修理・掃除するだけで

(18) 福山敏男「寢殿造の祖型と中国住宅」『月刊文化財』二一〇、一九八一

(19) 『天仁大嘗会記』「上卿取<sub>レ</sub>打拂筥<sub>一</sub>到<sub>レ</sub>南中階下<sub>一</sub>、脱<sub>レ</sub>沓於階下<sub>一</sub>、昇<sub>レ</sub>廣廂<sub>一</sub>。」

(20) 『礼記』祭法「王立<sub>レ</sub>七廟<sub>一</sub>、一壇一埽。曰<sub>レ</sub>考廟<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>王考廟<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>皇考廟<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>顯考廟<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>祖考廟<sub>一</sub>、皆月祭<sub>レ</sub>之。遠廟為<sub>レ</sub>祧、有<sub>レ</sub>二祧<sub>一</sub>、享嘗乃止。去<sub>レ</sub>祧為<sub>レ</sub>壇、去<sub>レ</sub>壇為<sub>レ</sub>埽。壇埽有<sub>レ</sub>禱焉祭<sub>レ</sub>之、無<sub>レ</sub>禱乃止。去<sub>レ</sub>埽曰<sub>レ</sub>鬼。」

(21) 岡田莊司「大嘗祭祭祀論の真義—遙拝・庭上・供膳祭祀」註7前掲書

よい。宗廟は一族の系譜を象徴するものでもあり、宗廟の常設は系譜の永遠性への重視を示していると考えられる。それに対し、大嘗宮は完全に仮設の建物であり、神嘉殿も新嘗祭の前に一年用の炊殿が新設される。更に、大嘗祭では悠紀殿の行事が終わった後、場を改めて主基殿の行事を行い、新嘗祭では祭祀場所は変わらないが、神座等を更新するのである。それは神の祟り、不浄を避けるための必要な嚴重な潔斎だとされている<sup>(22)</sup>。

宗廟では系譜の永遠性を、大嘗宮・神嘉殿では祭場の清浄性を重視する。その考え方の違いは祭器の扱いにも示している。西周の礼器の金文に「子子孫孫永宝用」という文章がよく現れ<sup>(23)</sup>、祭器は末永く使われていくことが望まれていることが分かる。それに対し、大嘗祭・新嘗祭では供物に新穀を使い、祭器にも新しく作ったもの(由加物、神服等)を使い、清浄・潔斎に関わる新しさは強く重んじられている。吉事である宗廟祭祀において行事ごとに几を変えることがあるが、それは新しいもので様々な飾りを示す敬神の作法であり<sup>(24)</sup>、清浄性を尽くすための祭場の変換、神座の更新とは異なる意味である。

## 二、内部配置と祭儀次第

### 1、天子の宗廟と宗廟祭祀

三礼によれば、宗廟祭祀の進行は一つの場所に限らず、室、堂、庭、更に廟門も祭祀場所になる。『礼記』郊特性に、

詔<sub>レ</sub>祝於室<sub>一</sub>、坐<sub>レ</sub>尸於堂<sub>一</sub>、用<sub>レ</sub>牲於庭<sub>一</sub>、升<sub>レ</sub>首於室<sub>一</sub>。直祭祝<sub>レ</sub>于主<sub>一</sub>、索祭祝<sub>レ</sub>于祔<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>神之所在<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>彼乎、於<sub>レ</sub>此乎、或諸遠<sub>レ</sub>人乎。祭<sub>レ</sub>于祔<sub>一</sub>、尚曰、求<sub>レ</sub>諸遠者<sub>一</sub>與。

とある。室に祝辞を申し、堂に尸を座らせ、庭に犠牲を屠り、室に牲首を供える。直祭(薦熟)では直接主に祝辞を申し、索祭(翌日の繹祭)では廟門で祝辞を申す。宗廟の様々な場所で神を招き供物を供え祝辞を申すのは、神(祖先)の所在が分からないからであるという。

鬼神は「洋洋乎、如<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>其上<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>其左右<sub>一</sub>」(『礼記』中庸)というような

(22) 註16 前掲笹生氏論文(二〇二〇(二))

(23) 任曉峰『周代祖先祭祀研究』西北大学博士学位論文、二〇一五

(24) 『周礼注疏』卷二〇「毎<sub>レ</sub>事易<sub>レ</sub>几、神事文、示<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>之也。」

存在なので、祭祀者に鬼神を実感させる措置が必要となる。天子の宗廟祭祀において、堂・室で几筵を設け神座とし、主を出し、祖先を代表する尸を立て祖先の衣服を着用させ、祖先の代わりに饗応を受けさせる。また金奏（堂下での器楽）で尸を廟内に迎え、登歌（堂上での声楽）で祖先の魂を天上に求め、裸礼（室で鬱鬯の酒を地に注ぐ）で魄を地下に求める。鬼神を顕在化するそれらの手段を通して、神がその場にいるが如く祭祀を行う。

その祭祀の中心は祖先（尸）への饗応である。まず堂で朝踐の礼を行い、王・后は事前に手を洗い（沃盥）、助祭者の助けで生の牲肉、朝事籩豆（野菜・肉醬等）、酒を献じる。次に室で饋食の礼を行い、尸は神座に着き、王・后以下は酒、饋食籩豆（果物、漬物、肉醬等）、半熟の牲肉、十分加熱した牲肉、炊き上がった黍盛（穀物）等を尸に献じ、尸は返杯（酢）し祝福の嘏辞を贈る。その後、天子が群臣を率いて楽舞を献じ、尸と嗣子・諸臣と相互に献酒し（旅酬）、助祭者への賜酒がある。尸を送った後、嗣子以下が尸の食べ残しを少し頂き（餼食）、撤饌する。

秦漢以降、祭祀に尸は立てなくなり、直接神主に薦献する。『大唐開元礼』では皇后の参与もなくなり、代わりに太尉が亜献を、光禄卿が三献を行う。但し金奏・登歌、沃盥・洗瓚、裸礼、献酒・献饌等の要素は周・唐制に共通的に見え、次第も大体同じである。

## 2、大嘗宮と天皇の大嘗

大嘗祭の中心的な行事、天皇による皇祖神への神饌供進・共食は大嘗宮正殿の室（新嘗祭は神嘉殿の神殿）で行う。正殿は南北五間、東西二間の建築であり、北の三間は室とし、南の二間は堂とし、堂の南側に席の戸を設け、布の幌を掛ける。室は天皇が神饌供進を行う場所で、堂は宮主と介添え役の采女の控えの間である。正殿では地面の上に束草を敷き、その上に播磨の簀を敷き、更に室では簀の上に席を敷く。卯日、掃部寮等が大嘗宮正殿の室の中央に寝座（神座）の白端御畳と坂枕を設け、打払布、寝具の衾・単、神服の繪服・匳服を供える（『延喜式』）。『兵範記』（仁安三年（一一六八）高倉天皇大嘗祭）に「神座巽角又供<sub>二</sub>神座半帖一枚<sub>一</sub>向<sub>レ</sub>巽也、其北敷<sub>二</sub>御座半帖一枚<sub>一</sub>」とあるように、寝座の東南側にもう一つの半帖の神座一東南向きの短帖を設け、短帖の北側に天皇の御座を置く。『後鳥羽院宸記』（「大嘗会神饌秘記」建暦二年（一一二二）順徳天皇大嘗祭）に神座の配置図（図3）が描かれている。天皇が御座に座って短帖の神座、即ち東南、伊

勢神宮に向けて神饌を供進する。

まず、天皇は陪膳采女の奉仕で御手水を行い、水は天皇の手に注がれ、下に容器で水を受ける。その作法は中国の沃盥の作法と酷似する。次に、天皇は天照大神をはじめとする天神地祇に御祈請の御言葉を申し、国家安穩・五穀豊穰を感謝し、新穀の神饌を供えることを報告し、自らの身体に災禍が起こらないように祈る（『後鳥羽院宸記』等）。次に、天皇は陪膳采女の奉仕で、御食薦の上にある稲と粟の御飯、生物（鯛・鮑・雑魚・醬鮒）、干物（蒸鮑・干鯛・堅魚・干鰯）、鰻汁漬・海藻汁漬、果物（干棗・搗栗・生栗・干柿）を箸で枚手に挟み、神食薦に載せ、神饌を御親供する。その後、陪膳采女は白酒・黒酒を本柏に注ぎ、天皇はそれを供えられた枚手の上に振り注ぐ。その献酒の所作は酒を地に注ぐという

中国の献酒作法に相似する。次に、米と粟の御粥の供進がある。次に、天皇は神宮に向けて拍手・称唯し、自ら稲と粟の御飯、白酒・黒酒を少し嘗める御直会がある。その後、撤饌し、天皇は再び御手水を行い、還御する。

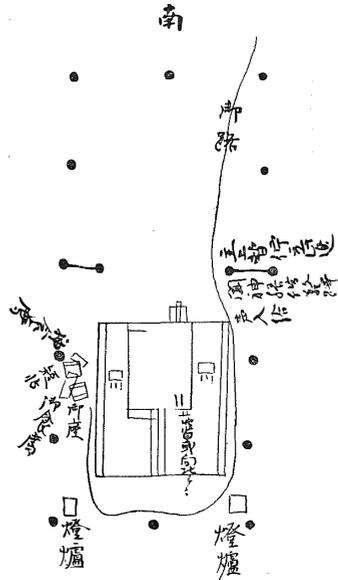


図3 『後鳥羽院宸記』に見る大嘗宮正殿の配置（神道大系編纂会編『踐祚大嘗祭』より）

### 3、小括

宗廟と大嘗宮・神嘉殿の内部配置及びそこで行う儀礼の異同を纏める。

共通点について、両方は共に、衣（神服）食（神饌）住（神座等）を整えた神の日常生活の場のように設えた空間で献饌を行う如在の礼である。そして、宗廟の堂・室といった異なる場所で神座を設け献饌することと、大嘗殿で寝座を設けながら伊勢に向けて短帖を設けて献饌することから、神の来臨・所在に対する不確かな観念を示している。中国古代において、祖先・神の所在、祭場に来臨する可否かが分からないにもかかわらず、神が祭場にいるが如く祭祀を行うべきであるという「祭如在」（『論語』八佾）の観念があり、日本では新嘗祭も「如在」（『日本後

紀』天長七年(八三〇)十一月辛卯条)の礼とされている。

また、両祭祀の中心的な行事は、天子・天皇親祭による祖先・皇祖神への饗応であり、両祭祀の祖先・祖神祭祀の本質を示している。具体的に、穀物・果物・海産物・酒という神饌の構成や、沃盥・祝文・供膳・献酒・共食・撤饌という献饌の構造は共通性を示している。

相違点について、まず、宗廟祭祀には、鬼神の存在や働きを実感させるために尸・神主等を設け、また降神の儀があるのに対して、大嘗祭・新嘗祭にそれはなく、代わりに皇祖神の鎮座地を意識して遥拝の形を採っている。立尸と降神の有無は祖先祭祀だけでなく、自然景観での祭祀等にも見え、それは古代日中の神観・祭祀観の根本的な相違を示す問題でもあり、今後の課題として考察していきたい。

神饌について、宗廟祭祀において古来の狩猟文化、火を使わない原始的な「茹毛飲血」の食生活の再現として、犠牲をその場で屠り、生・加熱不足・完全加熱の牲肉を次第に供える牲礼がある。それに対し、大嘗祭では古来の飲食習慣、不浄観によって家畜の供犠はなく、代わりに稲や海産物を特別に重視する。その神饌の原形は、三世紀の纏向遺跡(奈良県桜井市)から出土した動物遺存体(鳥獣魚等の骨)・野生種と栽培種の食用の植物遺存体(穀物や桃の種等)・壺・甕・鉢・高坏等の土器といった遺物が示した新嘗儀礼に見られ、伊勢湾岸地域との関わりが見られると指摘され<sup>(25)</sup>、日本独特な自然・社会環境に生じた祭儀の独自性を示している。

祭祀時間について、宗廟祭祀は「質明而始\_行事\_、晏朝而退」(『礼記』礼器)とあるように、朝から夕べまで行い、その大部分の時間は薦献を行っている。中国では宗廟祭祀以外の天地山川等の国家祭祀も昼間に行い、それは日が出ると働き、日が落ちると休むという人間の生活規律に相応しい。それに対し、大嘗祭・新嘗祭における神饌供進の儀は深夜から翌日の未明まで行い、それは「其神常昼不\_見而夜来矣」「夜也神作」(『日本書紀』崇神天皇十年九月壬子条)というように、神が夜に出るという日本の独特の神観によるものであろう。但し、中原国家に見えない夜祭りは荆楚地方(「九歌」「離騷」等)に見え<sup>(26)</sup>、中国南方の祭祀伝統

(25) 註16前掲笹生氏論文(二〇一九、二〇二〇(一))

(26) 黄靈庚「出土文献与当下的《楚辞》研究」『雲夢学刊』二〇一六年第三期、二〇一六

表 1 天子の宗廟祭祀と大嘗祭・新嘗祭の祭場・祭式の異同

	宗廟	大嘗宮	神嘉殿	共通点
祭場	宮城内の東南に常設 堂・室・房・廂	宮城の中軸に仮設 堂・室	宮城の中心に常設 (毎年炊殿を更新) 神殿・隔・廂	宮城の内部の東西対称の建物 神饌を調理・供進・共食する施設を持つ 神服・神饌・神座等を設ける
祭式	昼間の祭祀	夜間の祭祀		天子・天皇自ら祖先・皇祖神を饗応 神饌に穀物と酒が重要 沃盥・祝文・供膳・献酒・共食・撤饌の流れ
	尸・神主・降神、犠牲礼	遥拝		

が渡来人や『楚辞』の伝来等で日本の祭祀に影響を及ぼした可能性もある。

### 三、墓祭との関係

#### 1、宗廟祭祀の展開—陵寢祭祀

中国の祖先祭祀は元来廟寢一体の宗廟で行い、原則的に墓祭は行わないと言われるが、春秋戦国時代に入ると、墳丘墓の形式が流行し始まり、その上に後に寝と呼ばれる建築を立て墓祭を行う慣習が流行ってきた<sup>(27)</sup>。秦始皇帝はその慣習に従い、古来の宗廟の寢の部分を陵園に設け、前漢もそれを継承し、更に陵の傍らに原廟を設け、墓祭を重んじるようになっていく<sup>(28)</sup>。

陵園にある寢殿には、死者のために衣冠・几杖等、生きることを象徴する「象生」の道具を陳設し、時を告げる太鼓や水時計を設け、寝具を備え水を容れ、武器を陳列し、毎日四度の上食（献饌）を行い、陵園の傍らにある廟でも毎月祭祀を行い、大勢の祝宰・楽人・衛士等は死者が生きているが如く奉仕し続けた<sup>(29)</sup>。

(27) 楊寬「中国皇帝陵の起源と変遷」（初出一九八一）『中国古代陵寢制度史研究』上海人民出版社、二〇一六

(28) 後漢・蔡邕『独断』卷下「古不墓祭、至秦始皇出寢、起之于墓側、漢因而不改、故今陵上称寢殿、有起居衣冠、象生之備、皆古寢之意也。」

(29) 『漢書』卷七三・韋賢伝「而京師自高祖下至宣帝、与太上皇、悼皇考、各自居陵旁立廟、并为百七十六。又園中各有寢、便殿。日祭於寢、月祭於廟、時祭於便殿。寢、日四上食。廟、歲二十五祠。便殿、歲四祠。又月一游衣冠。而昭靈后、武哀王、昭哀后、孝文太后、孝昭太后、衛思后、戾太子、戾后各有寢園、与諸帝合凡三十所。一歲祠、上食二万四千四百五十五、用衛士四万五千一百二十九人、祝宰樂人万二千一百四十七人、養犠牲卒不在数中。」

蔡邕『独断』卷下「今洛陽諸陵、皆以晦望、二十四氣伏、社臘及四時日上飯。太官送用、

後漢に入ると、各陵園の傍らに立つ原廟は、中央の同堂異室の太廟に合わせて祭るようになり、墓祭の陵寝祭祀はより重視されるようになり、従来元旦に朝廷で行う元会儀と八月に宗廟で行う酎祭礼は陵寝に移動され、皇帝親祭の上陵礼と飲酎礼になった<sup>(30)</sup>。陵園に寝を立て祭祀儀礼を行うことは、薄葬を實行した魏晋の一時期を除いて、明清まで続けられている。

## 2、大嘗宮の原形—古墳形象埴輪群

前漢の陵寝祭祀の特徴は日本では五世紀以降の古墳形象埴輪群にも見られる。

五世紀初頭の行者塚古墳(兵庫県加古川市)北東側の造り出しでは、木棺・粘土槨に遺体を納め、その上に複数の家形埴輪を置き、周囲を円筒埴輪で方形に区画する。盾形・甲冑形・鞞形の埴輪も出土しているので、家形埴輪や区画の周囲に配置し、警護の役割を果たしたと推定されている<sup>(31)</sup>。また、同古墳西側の造り出しでは、家形埴輪の前に飲食供献用の高杯、壺、筑形土器等の土師器や、魚、鳥、餅、菱の実等の食物を模る土製模造品が出土し、古墳に納めた人物を象徴的に示す家形埴輪の前に土師器の食器や土製模造品の食物を並べていたことになる。

六世紀前半の今城塚古墳(大阪府高槻市)の北側内堤の埴輪祭祀区に柵形埴輪列(垣、門)によって四つの区画を作り、各区の中心に大型の家形埴輪があり、男性像(冠を被る男子、椅子に座る男子、武人、力士等)、女性像(両手で物を捧げる巫女)、動物類(馬、鶏、水鳥等)、器材類(大刀、盾等)等の埴輪を配置している。

笹生氏によると、円筒埴輪による区画は大嘗宮の宮垣に、饗応する女性像は大嘗祭で供饌の介添え役の采女に、武人像や盾・大刀形の埴輪は大嘗宮の南北門に配置される石上・榎井氏と楯・鉾に対応させることができ、古墳時代中期に成立した古墳の形象埴輪群が展示した、区画・遮蔽された空間での飲食供献の場面は、大嘗宮の原形を示しているという。それは前漢の陵寝祭祀の上食の様相にも相似し、区画用の円筒埴輪を陵園の垣牆に、家形埴輪を寝殿に、武人像・大刀・盾・甲冑形埴輪を陵寝の衛士・武器に対応させることができると考えられる。

---

園令、食監典<sub>一</sub>省其親陵所宮人<sub>一</sub>、隨<sub>一</sub>鼓漏<sub>一</sub>、理<sub>一</sub>被枕<sub>一</sub>、具<sub>一</sub>盥水<sub>一</sub>、陳<sub>一</sub>嚴具<sub>一</sub>。」

(30) 註27に同じ。

(31) 以下、古墳形象埴輪群及びそれと大嘗宮の関連性に関して、笹生衛「古墳と死者への儀礼」註5前掲書を参照している。

また、五世紀後半の保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）の形象埴輪配列 A 区 I 群では、大きな壺に柄杓型土製品が入れられ、巫女像がその壺から酌み出した液体を冠を被った男性像に捧げるという場面があり<sup>(32)</sup>、宗廟祭祀における瓊を以て尊から酒を酌み爵に入れて尸に捧げるという献酒の儀や、後漢以降の陵寢祭祀における飲酎礼に似ている。

#### 四、宗廟と大嘗宮・神嘉殿との関連性

以上、宗廟と大嘗宮・神嘉殿を祖先・祖神を饗応する場として、建築的・祭儀的な異同、墓祭との関係を考察してきた。そこで両者の関連性について疑問が生じ、両国の交流史を踏まえて検討してみる<sup>(33)</sup>。

紀元前一世紀から二世紀にかけて、倭人は漢王朝と朝貢外交・冊封関係を始め、中国から銅鏡や金具等の先進的な文物を齎して地域的な祭祀や墳墓に用いた。そこで漢字との接触が始まり、祭祀思想上に何らかの影響を受けている可能性が推測される。

三世紀に入ると、倭国は魏晋南北朝との政治的な交流を深め、朝貢外交と冊封関係を維持し、倭国の内乱に魏の介入をさせた。この頃、纏向遺跡に示した供膳祭祀——新嘗儀礼が出現している。

四・五世紀代において、北東アジアの争乱（五胡十六国）に巻き込まれた中国・朝鮮半島の人々は渡来し、倭国は彼らを積極的に登用し、それによって先進的な技術・文化・文物を導入した。その中、大和王権から供与された品々を捧げ、共通した祭祀により祭祀を行う形は日本列島の各地の自然景観、交通要所で成立し、それは『礼記』の祭祀思想の影響があると笹生氏が指摘している。また五・六世紀代に、中国の祖先意識、宗廟・陵寢祭祀の影響を受け、区画・遮蔽された空間の中で死者・祖先への供膳祭祀の形態は大嘗祭の原形——古墳儀礼として受容され、日本列島の各地で成立したと考えられる。

七世紀中頃以降、隋唐の律令制度が導入され、律令制度に相応する宮都の構

(32) 若狭徹「埴輪を発掘する」『埴輪は語る』筑摩書房、二〇二一

(33) 以下、平野卓治「金印の賜授」、田中史生「武の上表文—もう一つの東アジア—」、大橋信弥「王辰爾の渡来—フヒトの系譜—」、榎本淳一「遣唐使と通訳」（平川南ほか編『文字と古代日本—文字による交流』（吉川弘文館、二〇〇五）所収）、笹生衛註 4 前掲書を参照している。

造、建築の様式とそこでの儀礼が整備されてきた。そのなか、天武朝より畿外の国郡卜定を伴う大嘗祭は成立し、二院構成の大嘗宮も相応して成立した。また、平安時代初期に成立した神嘉殿も宗廟の形式・理念を強く意識していると考えられる。

大嘗宮・大嘗祭の成立に中国の宗廟・宗廟祭祀の影響があったと考えられるが、複製品と言えない。前述した、大嘗祭に供犠や降神の儀はなく、特に祭場の清浄を重視するといった特徴の他に、実在した歴代天皇ではなく、皇祖神のみを祭祀対象とすることも宗廟祭祀と異なる。また、大嘗祭では畿外の国郡卜定等で全国を動員し、国民奉祝・奉賛の儀礼としての性格は天子の宗廟祭祀に見えにくい。そういった相違が生じた歴史的・文化的背景について、今後の課題としたい。

## おわりに

従来、大嘗祭に関する研究には国際的な視野を持ったものは少なく、大嘗祭の源流・本質について研究視角の制限性を示している。本稿では、宗廟と大嘗宮・神嘉殿との比較考察を試み、宗廟祭祀と大嘗祭・新嘗祭を祖先・祖神への神饌供進・共食儀礼として、その祭祀施設と中心的な行事の異同・関連性を考察し、大嘗祭の祖神祭祀の性格と中国祭祀の影響を推測される。

問題点として、今回は三礼に示した周制だけに基づいて比較考察を行っている。三礼は中国各王朝の礼制のテキストとして、五・六世紀代にそれを含む儒教経典が、それを解説できる五経博士と共に、百済を経由して日本に渡来し、日本の神観・祭祀観に直接的な影響を与えた可能性は高い。但し一方、同時代の六朝期の中国の神観・祭祀実態や隋唐期の律令国家下の祭祀制度、そして中国文化を日本に直接輸出した朝鮮半島の祭祀制度や信仰の影響も想定される。今後は考古学資料と文献史料とを合わせて、宗廟祭祀の時代ごと・地域ごとの変化・特徴を更に確認し、皇祖神を祀る神宮との関係を含めて、日本の祖先祭祀との比較考察を深めていきたい。

## 参考史料

飯田武郷『日本書紀通釋』畝傍書房、一九四〇  
増補史料大成刊行会編『兵範記』臨川書店、一九六五

- 国史大系編修会編『続日本紀 前編』吉川弘文館、一九六九  
新訂増補国史大系『日本後紀』吉川弘文館、一九八〇  
神道大系朝儀祭祀編五『踐祚大嘗祭』神道大系編纂会、一九八五  
神道大系古典編十一『延喜式上』神道大系編纂会、二〇〇〇  
皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』思文閣出版、二〇一二  
班固撰・顔師古注『漢書』中華書局、一九六二  
宋濂等撰『元史』中華書局、一九七六  
景印文淵閣四庫全書經部禮類『儀禮釋宮』臺灣商務印書館、一九八三  
景印文淵閣四庫全書經部禮類『儀禮圖』臺灣商務印書館、一九八三  
景印文淵閣四庫全書經部四書類『論語注疏』臺灣商務印書館、一九八四  
景印文淵閣四庫全書史部政書類『通典』臺灣商務印書館、一九八四  
景印文淵閣四庫全書史部政書類『大唐開元禮』臺灣商務印書館、一九八四  
景印文淵閣四庫全書子部雜家類『獨斷』臺灣商務印書館、一九八六  
鄭玄注・孔穎達正義・呂友仁整理『禮記正義』上海古籍出版社、二〇〇八  
鄭玄注・賈公彥疏・彭林整理『周禮注疏』上海古籍出版社、二〇一〇  
趙嫺・代坤編『考工記圖二卷』国家図書館出版社、二〇一五